

 日本語版 ニュースレター	No. 63 平成23年(2011年)7月31日発行 北海道・マサチューセッツ協会 会長 森本 正夫
Hokkaido Massachusetts Society 北海道・マサチューセッツ協会	発行所 〒060-0003 札幌市中央区北3条西7丁目 道庁別館12階 TEL011-231-3392 FAX011-231-3666 発行人 中垣 正史 E-mail homas @ siren.ocn.ne.jp

北海道開拓の基礎を築いた指導者たち⑱

世界地図に「間宮海峡」の名を残した間宮林蔵の生涯と業績 —江戸時代後期に北蝦夷地探検達成、そして蝦夷地の詳細な測量地図を作成—

■まえがき

北海道庁「赤れんが庁舎」の2階に、「樺太関係資料館」という展示室があります。ここには、間宮林蔵のことが詳しく紹介されています。銅像もあります。〈本稿2頁に説明・年表・銅像を転載〉

今回は、この「間宮林蔵」(1780年・安永9年～1844年・天保15年)の探検と測量の生涯とその業績をたどってみたいと思います。その時代は、開拓使時代(1869～1882)より、さらに一世紀前です…

■時代背景

鎖国幕藩体制にとっては、ロシアのカムチャッカ半島・千島方面への進出やサハリンの南下政策は脅威でした。さらに江戸時代中期、多くの外国船が各地に寄港を求めてきます。1789年(寛政元年)6月、ロシア使節ラクスマン一行が、根室を経て箱館来航。1796年(寛政8年)9月、イギリス船プロビデンス号の内浦湾(室蘭)来航。この時、ブロートン船長が有珠山や駒ヶ岳などの火山群に驚き「ボルケイノーベイ(噴火湾)」と命名したといわれます。こうした度重なる外国船出沒に対して幕府は緊張の度を強めて、北辺の警備を急ぎます。幕府は1798年(寛政10年)蝦夷地再調査の上、翌年、東蝦夷地を直轄。松前根室間の道路を整備し、択捉航路を開き、伊能忠敬の東蝦夷地海岸測量(のち間宮林蔵が西海岸を測量)、八王子千人同心子弟の屯田入植、場所請負制度の廃止と直掬き実施、有珠・様似・厚岸に官寺を創建するなどの対策を講じています。

ロシア使節レザノフが長崎に来航したのは、1804年(文化元年)ですが、幕府に国交を拒絶され、憤激のあまり部下にカラフト・利尻・択捉で暴行略奪を行わせています。報をうけた幕府は、1807年(文化4年)松前藩を奥州梁川に移封して、蝦夷地全島を直轄とし、北奥諸藩に蝦夷地を警備させます。

1811年(文化8年)、千島列島を南下したロシア軍艦ディアナ号のゴローニン艦長は国後島に上陸、警備の日本側に抑留されます。ディアナ号は翌年艦長救出に来航、択捉近海で高田屋嘉兵衛を捕らえます。高田の誠実な調停尽力で問題は無事解決し、日露間の緊張は緩和します。それで、幕府は1821年(文政4)蝦夷地を松前藩に返しますが、内外の平穏は長続きしません。国籍不明の外国船が厚岸・有珠などに来航、警備の藩兵と交戦し、津軽海峡にも外国船が出沒し、幕府は松前藩に新たに築城を命じています。ペリー黒船来航の翌年、1854年(嘉永7年)日本は開国、箱館・下田の2港開港となり、幕府は蝦夷地の大部分を直轄し、箱館奉行を置きます。この時、日露間で、千島方面の国境は択捉島とウルップ島の間に決定しましたが、樺太方面は決まらず、課題として残りました。

■ 間宮林蔵の年譜・説明文・銅像

樺太関係資料館 <道庁赤れんが庁舎2階にあります>

- 1780 年(安永 9 年) 常陸国筑波郡上手柳(現つくば市)の農家に生まれる。父間宮庄兵衛・母(森田)クマ。
- 1799 年(寛政 11 年) 20 歳 村上島之允に随行し蝦夷地(北海道)に渡る。
- 1803 年(享和 3 年) 24 歳 蝦夷地御用雇に任ぜられる。
- 1808 年(文化 5 年) 29 歳 カラフト探検を命ぜられ、松田伝十郎と共に北上し、6 月 20 日ラッカに至りカラフトの離島を確認。
- 1809 年(文化 6 年) 30 歳 再度カラフト探検を命ぜられ北上、5 月カラフトの北端ナニオーに至り、カラフトが離島であることを再確認。
6 月アイヌのコーニらに同行し、海峡を渡り東韃靼に至り、デレンで満州仮府の役人と会う。
- 1810 年(文化 7 年) 31 歳 村上貞助の協力で、「北蝦夷島地図」、「北蝦夷分界余話」、「東韃地方紀行」を著す。
- 1814 年(文化 11 年) 35 歳 蝦夷地測量。
- 1822 年(文政 5 年) 43 歳 松前奉行廃止。江戸に帰り普請役となる。
- 1824 年(文政 7 年) 45 歳 安房上総御前備掛手付となり、異国船渡来の噂を内偵のため、東北海岸を巡視。
- 1826 年(文政 9 年) 47 歳 天文方兼書物奉行高橋景保がシーボルトに対し、クルーゼンシュテルンの航海記と交換に、伊能忠敬の日本地図、間宮林蔵のカラフト地図を贈ることを約束する。
- 1832 年(天保 3 年) 53 歳 シーボルト著「日本」で日本辺界略図の翻訳図に「間宮の瀬戸」の名を始めてヨーロッパに紹介される。
- 1842 年(天保 13 年) 63 歳 幕府、林蔵にカラフトおよび東韃靼地域の自製図模写を命ずる。
- 1844 年(天保 15 年) 65 歳 2 月 26 日江戸本所外手町の寓居に没する。

<参考文献「東韃紀行」間宮林蔵著 大谷恒彦訳「教育社」>

間宮林蔵と樺太

松前藩がクシュンコタン(楠溪)に穴陣屋を設けたのは 1679 年(延宝 7 年)のことですが、それ以降も樺太の実態を調査するとともに漁場の開発やアイヌらとの交易もするようになっていました。

しかし、その樺太にもロシアの進出が目立つようになり、幕府は樺太を重要視するようになり、数名に樺太調査を命じていましたが、1808 年(文化 5 年)間宮林蔵は松田伝十郎とともに樺太最北端まで踏破して樺太が離島であることを確認しました。

さらに翌年、間宮林蔵は単身樺太に渡り、北樺太のナニオーから海峡を渡り、黒竜江をさかのぼりデレンまで至りました。この時の記録は「東韃地方紀行」として刊行されましたが、後年シーボルトによって、この海峡は間宮の瀬戸としてヨーロッパに紹介され国際的に有名になりました。
樺太の歴史を語る上で忘れてはならない先駆者の一人です。



■間宮林蔵の生い立ち

1780 年(安永 9 年)常陸国筑波郡上平柳(現伊奈町上平柳)の農家に生まれます。名は倫宗(ともむね)、号は燕崇(ぶすう)、林蔵は通称です。林蔵は父庄兵衛、母クマの一人っ子として両親の愛情を一身にうけて育ちます。林蔵の祖先は、戦国時代、小田原北条氏の家来である間宮豊前守康俊が、秀吉の小田原攻めに敗れてこの地に落ちのびた末裔と伝えられています。林蔵は幼少より才気煥発、算術の才があり、神童と呼ばれたといわれます。8 歳ころから寺子屋に通い、13 歳の時筑波山に登り立身出世を祈願したりしたといわれます。

1795 年(寛政 7 年)16 歳の時、小貝川の堰止め工事に加わり、出張中の幕府普請役・下条吉之助に地理や算術の才能を認められて江戸に修行に出ます。地理学者村上島之允(1760―1808)に師事して規矩術(三角測量)を学び、1799 年(寛政 11 年)20 歳の時、村上島之允の従者として初めて蝦夷地に渡ります。1800 年(寛政 2 年)蝦夷地御用掛雇となり、函館にて伊能忠敬(1745―1818)に偶然会い師事、のち天測術(緯度測定法)を学びます。24 歳以降、東蝦夷地・南千島の測量に従事し、26 歳の時には、天文地理御用掛として、蝦夷地日高のシツナイに勤務しています。

■蝦夷地測量

1806 年(文化 3 年)、エトロフ島シャナ会所に勤務し測量・新道開発に当たっていた時、幕府から通商の要求を断られたロシア使節レザノフの部下が復讐のため、軍艦によりシャナの会所襲撃した「シャナ事件」に遭遇します。会所は防戦に努めるも、すべてを放棄して敗走、責任者 2 名が自決。江戸に上り取調べを受けますが、林蔵は徹底交戦を主張したことが認められて咎めなしでした。

■北蝦夷地探検

1808 年(文化 5 年)29 歳の時、第 1 回樺太探検を命じられ、調役下役元締松田伝十郎(1769―1843)と共に樺太に渡ります。伝十郎は西海岸、林蔵は東海岸を調査して 6 月 20 日ラッカ岬に至り、宗谷に戻っています。林蔵は再度の探検を願い出て、7 月第 2 回探検に出発して樺太で越年、1809 年(文化 6 年)海峡最狭部を突破して、最北端ナニオーにまで達します。そして、「間宮海峡」をしっかりと確認したのでした。そこからアイヌ酋長の舟で大陸に渡り、黒竜江下流地方を探検、清国の仮役所デレンで清国役人と会見しています。こうして、当時の清、ロシア及び日本の勢力範囲を確認しました。1810 年(文化 7 年)9 月宗谷に帰着。村上貞助(1780―1846)と共に、「東韃地方紀行」「北夷分界豫餘話」を編集し、「北蝦夷島地図」を作成しています。

さて林蔵は、この樺太調査には決死の覚悟で出発しています。郷里に戻って墓を建て、再び故郷に生きてもどることは出来ないのではないかという思いがあったようです。

■蝦夷地の測量・詳細な地図の作成

1811 年(文化 8 年)江戸に帰り、「東韃地方紀行」等報告書を幕府に提出。4 月松前奉行支配調役下役格に昇進します。この間、伊能忠敬から緯度測定法を学びます。12 月江戸を立ち蝦夷地に向かい、松前の獄舎に捕らえられていたロシア軍少佐ゴローニンの尋問を行っています。

その後一旦帰府、9 月再び蝦夷地に下り、各地の測量を続けます。その後、父庄兵衛の死、伊能忠敬の死を弔うために、江戸に帰っています。

1912 年(文化 9 年)、再度蝦夷地に渡り、3 年がかりで、伊能忠敬の未測量地域の海岸や内陸部を歩き回って精密な測量を行っています。1821 年(文政 4 年)完成の忠敬の『大日本沿岸輿地全図』には、この林蔵の測量が大きく生かされています。この測量の成果はさらに、今日の北海道地図の基礎となる「蝦夷図」の完成となります。林蔵の「蝦夷図」には主な集落の地名が驚くほど精密に細かく記入さ

れています。これは、林蔵が何度も蝦夷地に渡り、約12年間かけて、全道の各市町村をくまなく歩き、正確な測量をした成果なのです。後に、北海道の名付け親として「松浦武四郎」が有名になりますが、この「間宮林蔵」の北海道の精密な測量と詳細な地図作成について、その功績がもっと高く評価されるべき人物であると思います。

■隠密活動

1822年(文政5年)江戸に帰り普請役、1824年(文政7年)安房上総御備場掛手付を命ぜられ、異国船渡来の内偵のため、東北地方の海岸を巡視します。8月母の死を弔い、以後、外国船渡来の風聞や密貿易調査などの隠密活動に従事します。

外国人との文通がご法度の時代、1828年(文政11年)、高橋景保経由で届いたシーボルトの林蔵あての小包を、開封せずにそのまま勘定奉行に報告提出します。このことが発端となって、幕府天文方高橋景保とシーボルトとの交流が明らかとなり、「シーボルト事件」が起こったといわれています。

[注]シーボルト(1796～1866)<ドイツ人医師・博物学者>は、長崎出島のオランダ商館付医師として1823年(文政6)来日<27歳>、内科や眼科の手術を行い、ヨーロッパの科学技術を伝える。長崎奉行の好意より出島を出て、郊外の鳴滝塾で西洋医学・蘭学を教えて多くの弟子を育てます。一方、日本に関するあらゆる分野の資料を収集したといわれます。

シーボルトが1826年(文政9)江戸参府の折、幕府天文方書物奉行の高橋景保(作左衛門)と親交を結び、シーボルトは景保に洋書を贈り、景保は見返りに御禁制の樺太・蝦夷・日本地図(伊能図)などを贈っていたことが発覚します。

高橋景保は伊能忠敬の「大日本沿岸輿地全図」を忠敬没後に完成させた優れた学者ですが、捕らえられ獄死(45歳)。その遺体は塩漬け保存の後、斬首刑に処せられたといわれます。一方シーボルトは、1829年(文政12年)追放処分となりますが、帰国後、1832年(天保3年)、その著書「日本」の中で、間宮海峡(まみやのせと)の名を初めて世界に紹介したのでした。

■晩年

天文方高橋景保は、林蔵の大師匠高橋至時の息子であり、この密告事件後、林蔵は世間から冷酷な人間として非難され、探検家としての名声を失ったといわれます。事件の翌年、幕府から隠密を命じられて長崎に下ります。2年後、隠密として石見国浜田で密貿易事件摘発の発端を掴みます。以後、林蔵は人生の後半を隠密として、諸国を巡り諜報活動をしています。1834年(天保5年)以降、水戸藩へも出入りして、海防問題などを献策したといわれます。

晩年は身体が衰弱し、隠密行動も不可能になったようです。1838年(天保9年)、59歳の時に、長年の激務が祟り病床につきはじめて、6年後の1844年(天保15年)2月26日、江戸本所外手町の自宅で病死します。65歳の波乱に満ちた生涯でした。1904年(明治37年)、正五位の贈位を受けたあと、1910年(明治43年)、志賀重昂らの仲介で「顕彰記念碑」が建てられています。

林蔵には実子がなかったので、分家筋の子孫が継いで現在に至っています。茨城県筑波郡伊奈町上平柳には、郷土の偉人を顕彰する「間宮林蔵記念館」が1993年(平成3年)6月3日{測量の日}に開館しています。また、1971年(昭和46年)に移築・復元された茅葺屋根の農家「生家」もあります。

林蔵のお墓は、郷里専称寺にあり、両親とともに眠っています。このお墓は、1807年(文化4年)樺太探検に出発するにあたり、林蔵自ら建立したお墓です。身分の低い武士にあった小さなお墓です。

お墓は、1955年(昭和30年)、茨城県の史跡に指定され、郷土の偉人「間宮林蔵」顕彰のため、子孫伊奈間宮家・専称寺の協力を得て、保存・公開されています。

■あとがきにかえて一北海道開拓の基礎を築いた探検家・測量家たち

江戸中期からのロシアの南下に備えるために、幕府は、蝦夷地探検隊を次々に送り込んでいます。

◇最上徳内(1755－1836)、出羽国(山形県)の農家の生まれ。蝦夷地・千島エトロフ探検の先駆者。

生来学問を好み、天明元年(1781 年)江戸に出て幕府の医師の下僕となり本田利明に学ぶ。1785 年(天明 5 年)幕府第 1 回蝦夷地探検に参加、翌年千島エトロフ探検 4 ヶ月に及ぶ。北辺の急を幕府に報告。1807 年(文化 4 年)ロシア船来航、支配調役として北方警備のことを監察し、またアイヌ交易の改善にも努力します。その後も蝦夷地調査を重ね、1798 年(寛政 10 年)、東蝦夷地探検で近藤重蔵の配下として国後・択捉に渡ったのは、43 歳、7 度目の渡航でした。

蝦夷地に渡ること 9 回に及びました。この探検の成果として「蝦夷草紙」など多くの地誌や地図、アイヌ語事典などを著しています。蘭医シーボルトの信頼厚く、その著書「日本」により、最上徳内は「18 世紀における最も卓越した探検家」として海外にも紹介されました。徳内は、江戸の下町でひっそりと 81 歳の生涯を終えています。

◇近藤重蔵(1771－1829)、江戸町方与力、將軍直参旗本の家柄に生まれる。国後・エトロフ探検。

幼時神童と謳われ、13 歳にして背丈 180 ㍍。湯島聖堂の学問吟味に合格、24 歳で長崎奉行。27 歳、1798 年(寛政 10 年)、東蝦夷地探検で下野源助、案内役の最上徳内らと国後・択捉に渡り調査後、「大日本恵登呂府」の標柱を立てて、調査団 4 名とアイヌ民族協力者 11 名の名前を書き連ねたといわれます。帰途、蝦夷地道路開削の最初といわれる広尾の山道三里半を開削、「東蝦夷道記」を残しています。

翌年、再び択捉調査にあたり、高田屋嘉兵衛に命じて航路調査をしています。以来 5 度にわたり蝦夷地探検を行っています。江戸の戻って、幕府の本府を構えるのは石狩川下流が良いと進言しています。これが、後に松浦武四郎らの提言もあって、札幌が首都となる発端になったとされています。

晩年は、55 歳の時、長男の殺人八丈島送りの事件で、父親の重蔵も禁固刑の身となり座敷牢の生活となります。3 年後、不遇のまま 58 歳の生涯を終えています。

◇伊能忠敬(1745－1818)、下総(現千葉県九十九里町)の生まれ。18 歳の時、酒造家伊能家の婿養子となります。忠敬は儉約を徹底して約 10 年で家業を建て直し、1783 年(天明 3 年)の大飢饉の時(38 歳)、私財をなげうって地域の窮民を救済したといわれます。この功績が幕府に認められ苗字・帯刀を許されています。

50 歳の時、資産を残して引退。「地球の大きさを知りたい」という好奇心から、本格的に測量・天文学を勉強するため江戸に出ます。当時浅草に星を観測して暦(こよみ)を作る天文方暦局があったのでした。そこで、当時の天文学の第 1 人者、高橋至時(よしとき)の門下生となります。時に、至時 32 歳。忠敬 51 歳。猛勉強の末、忠敬は巨費を投じて自宅を天文観測所に改造し、日本ではじめて金星の子午線経過を観測したといわれます。

その後、私費で全国各地の測量を行います。羅針で方位を調べ、歩数で距離を測定したのでした。幕府に願い出て、地図作成のため東日本全体の測量許可を得ます。1800 年(寛政 12 年)55 歳。江戸を出発。測量方法は、歩幅が一定になるように訓練し、数人で歩いて歩数の平均値を出して距離を計算する方法でした。昼は測量、夜は天体観測して誤差を修正するという努力を、3 年間続けて、東日本の測量を終え江戸に戻ります。早速その結果を、師匠の至時と共に最新のオランダ天文学書と照らし合わせて、ほとんど誤差のない正確なものであることに感激したといわれます。しかし、その喜びの中、至時は天文学書の翻訳に無理を重ねて病に倒れ、翌年 39 歳で病死しています。

半年後、忠敬に、西日本地図作成の幕命が下ります。1805年(文化2年)60歳。再び江戸を出発。今回はいわば国家的な事業として、100人規模の測量隊で本州・四国・九州へと測量を進めますが、体力が衰え始めた忠敬には過酷なものとなり、内陸部の調査、四国の測量に日数がかかり、九州の測量を終えて、江戸の戻ったのは、1815年(文化12年)2月19日。忠敬は70歳になっていました。

その後、実際の測量の数値の誤差を修正する計算に入ったとき、忠敬は肺病にかかっている、そのまま回復することなく、1818年(文政元年)73歳で病没しています。しかし、高橋景保(至時の息子)や弟子たちは、忠敬の死を伏せて地図を完成させたのです。

こうして、1821年(文政4年)日本最初の実測地図「大日本沿海輿地全図」が江戸城大広間で公開されたのです。大図214枚・中図8枚・小図3枚の途方もない規模のものでした。

後に、間宮林蔵の詳細な蝦夷地の探検測量により、補正完成した「大日本沿海輿地全図」により、はじめて北海道の正確な形が明らかになります。

忠敬の遺言「私が大事を成し遂げられたのは、至時先生のお陰である。どうか先生のそばに葬ってもらいたい」という願い通り、現在も、上野の源空寺に師弟の墓石が並んでいます。

- ◇**間宮林蔵**(1780—1844)、1799年(寛政11年)4月、初めて蝦夷地を踏査、翌年蝦夷地御用掛雇となり、箱館で偶然、伊能忠敬に会い師事します。以後、12年間にわたり蝦夷地探検・測量をしています。1808年(文化5年)～翌年、カラフト探検により離島確認。「間宮海峡」の名を残す。〈詳細、本稿参照〉
- ◇**松浦武四郎**(1818—1888)、伊勢国須川村(現三重県松坂市)の庄屋に生まれる。国内各地遍歴の後、蝦夷地探検をめざします。1845年(弘化2年)以来、探検家として3回、幕府・政府役人として3回、15年間にわたり蝦夷地を内陸部も含めて縦横に踏査して、多くの探検日誌・地図などの優れた著作を残しています。後に、開拓使役人となり、「北海道」の名付け親として有名になります。

＜詳細は、「HOMAS」56号 参照＞

■遠くを見つめる間宮林蔵…日本最北端 宗谷岬の銅像と説明板



間宮林蔵渡樺の地 (説明板)

時あたかも文化5年4月13日(1808)幕命により間宮林蔵は、松田伝十郎と共に此の地より北蝦夷地(カラフト)探検の途についた。

流氷は去ったものの、なお酷しい寒気と荒波の宗谷海峡をのりこえて人情、風俗の異なる北蝦夷に渡り、特に東海岸を隈なく調べた。

この年彼は単身北上して黒竜江をさかのぼり、北蝦夷は大陸と海峡をへだてた完全な独立島であることを発見した。

林蔵の「東韃紀行」(とうたつきこう)は沿海州地方の世界最初の記録であり、後にシーボルトが「間宮の瀬戸」と名付けヨーロッパに発表してその功績をたたえた。

稚内市教育委員会

＜主な参考文献及び参考資料＞

- 「北海道の歴史」榎本守恵著 北海道新聞社 □「続々ほっかいどう百年物語」STV ラジオ編 中西出版
□「間宮林蔵」吉村 昭著 講談社文庫 □「間宮林蔵・探検家一代ー海峡発見と北方民族」高橋大輔著 中公新書ラクレ □「樺太関係資料館」資料 道庁赤れんが庁舎 □インターネット資料など

平成23年度 第1回 国際交流ランチセミナー記録

～異文化理解・異文化交流の昼食交流会～

日時 平成23年6月25日(土) 11時00分～14時00
会場 北大構内 レストラン「エルム」(札幌市北区北11条西8丁目)

<ゲスト>

陳 競華	チン ジンホ	札幌大学留学生 (中国)	F
鄭 思嘉	チン スウジャ	札幌大学留学生 (中国)	F
マルキンティワ・ダーシャ		北海学園大留学生 (ロシア)	F
ユラソフ・イリーナ		北海学園大留学生 (ロシア)	F
ラブシェバ・マリナ	(マリーナ)	北海学園大留学生 (ロシア)	F
Allen Paul Heffel	(アレン)	札幌市在住 (米国)	M
EDLINGER Andreas	エトリンガー アンドレアス	小樽商大留学生 (オーストリア)	M
OLIVAS-DIAZ Ivan Omar	オリバスディアスイヴァンオマル	小樽商大留学生 (米国)	M
BALAN Daria	バラン ダリア	小樽商大留学生 (ロシア)	F
CARMAN Julia Adele	カーマン ジュリア アデル	小樽商大留学生 (ニュージーランド)	F
Melanie A. Yamazaki	メラニー・ヤマザキ	千歳市在住 (ニュージーランド)	F
child (Sean)	(ショーン渚音)		

概要: この国際交流ランチセミナーは、2001年(平成13年)から、広く多国籍の北海道在住外国人をゲストとしてお招きして、国際交流や異文化理解の楽しい時間を共有しています。今回は、札幌大学、北海学園大学、小樽商科大学の留学生など、11名をゲストとしてお迎えしました。(ほんとは20名くらいのはずでしたが…) このセミナーは、今回で30回目です。参加者は、合計46名でした(通訳は、会員の山崎 秀樹さんをお願いしました。) このセミナーは、約3時間の、各テーブルごとの交流を主目的として実施していますが、ここには、各ゲストの挨拶スピーチの概要をご紹介します。

今回は、終了後、北大キャンパスツアーを実施しました。小樽商大の留学生も含めて10数名の参加者があり、好天にも恵まれて快い緑の中の散策を楽しみました。

1 アレン・ヘッフェル(米国・男性)

皆さんこんにちは。私は、アレン・ヘッフェルと申します。アメリカ・カリフォルニア州、ロサンゼルス出身です。札幌には1年半滞在しています。とてもいい街だと思っています。

ロサンゼルスでは雪は降りませんので、多くの人はロサンゼルスの人々はスキーができないと思っています。しかし、実際は2時間ほど車で走れば、高い山がありますので、ロサンゼルス市近郊でもスキーができるのです。ということは、ロサンゼルスに来れば、同じ1日の間にスキーと海水浴の両方を楽しむことができるということになります。(笑)

私は、ロサンゼルスでも英語教師をしております、いろいろな言語を学び多くの国の人と交流するのが大好きで、とても興味を持っています。現在は、札幌で英語教師をしています。

ぜひ皆さんにも、多くの言語に触れささまざまな人と話すことを楽しんでいただければと思っています。今後もどうぞよろしくお願いいたします。今日は、ありがとうございました。

(アレンさんには、「2011 英語でガイドしよう実践講座」の講師をお願いしています。)

2 ジュリア・カーメン（ニュージーランド・女性）

皆さんこんにちは、私はジュリア・カーメンです。ニュージーランド北島の出身です。私は、ニュージーランドの学園都市ダニーデン市（注：1980 年小樽市と姉妹都市提携の調印を行い、市民使節団交流・教員の研修交流・姉妹校交流などが継続）のオタゴ大学の学生です。現在、半年のプログラムで小樽商科大学の留学生として小樽に滞在しています。小樽での生活を楽しみ、様々な経験をしたいと思っています。これからどうぞよろしくお願いします。

（注：小樽商科大学とオタゴ大学は、1989 年以来、留学生の交換を行っています。）

3 イリーナ・ユラソワ（ロシア・女性）

皆さんこんにちは。私はイリーナといいます。ロシアのサハリンから来ました。日本にとっても近い島です。まだあまり有名ではない島ですが、サハリンでは天然ガスのプロジェクトが発展してきていて、多国籍企業が多くなってきています。私は、日本には4回目の訪問で、札幌は2回目です。4月に札幌に来ましたが、来月サハリンに帰らなければなりません。現在、北海学園大学でロシア語の TA（ティーチングアシスタント：教授の補佐）をしています。日本の生活がとても気に入っています。札幌には、多くの外国々から来た人が、とても多く住んでいて、そのような人と交流するのがとてもおもしろいと思っています。今日はお招きいただき楽しい時間をすごしています。どうぞよろしくお願いいたします。

4 陳競華・鄭思嘉（中国・女性）＜日本語で＞

みなさんこんにちは。私たちは中国の深圳大学から札幌大学に編入してきました。皆さん、深圳(しんせん)は知っていますか？ 深圳は中国の南の広東省にある都市です。香港の隣の都市です。香港とつながっていますので、機会があれば香港にお越しの際はぜひ深圳にもお越しください。

私たちは深圳大学の学生で、今年編入生として札幌大学に来ました。まだ来たばかりで、まだ日本のことで知らないこともたくさんありますが、札幌はとてもきれいな街で、風景も空気も新鮮ですし、人々もとても優しいと思います。

深圳大学では日本語を勉強していました。大体 2 年間ほど勉強しました。現在、札幌大学では多文化コミュニケーションコースを選択しています。どうぞよろしくお願いします。今日はありがとうございました。

5 オマール・ディアス（米国・男性）

皆さんこんにちは 私はオマール・ディアスです。アメリカから来ました。私の両親はメキシコ出身です。私はミシガン州出身です。ミシガンといえば五大湖ですが、もし皆さんが五大湖の名前を全部挙げてくださいと私に聞いても、全部答えられないかもしれません。（それだけ大きな湖が広範囲にわたっています）

このランチセミナーは 2 回目です。今回は、私の故郷の話をしたいと思います。私はサウス・ヘイブンという小さな町出身です。ミシガン湖のほとりにあります。夏はボートで湖を回ったり、また湖で泳ぎますし、釣りもします。ジェットスキーや水上スキーもできますので、水の上のことならだいたいできます。

故郷の町は小さい町ですが、湖があるおかげで年中様々な活動を行うことができます。気候が北

海道と似ていて、冬はとても寒いので湖が凍ります。そうすると湖の上を歩いたり、車で凍った湖を走ったりできます。氷に穴を開けてワカサギ釣りのようなこともできます。小さい町ですが、そんな風にたくさんのお楽しみをすることができるのです。今日はご招待いただき、ありがとうございました。

6 アンドレアス・エドリンガー(オーストリア・男性)

私はオーストリア出身です。ウィーンっていう街は有名なので聞いたことがありますよね。オーストリアにはウィーン以外にも素晴らしいものがたくさんあります。オーストリアは北海道と面積も人口もほぼ同じくらいです。四季もありますし、オーストリア国内でも地域によって文化や歴史も大きく異なります。私はオーストリアの南部出身です。山のふもとでの小さな村で生まれました。オーストリアで最も高い、コースクロックという山のふもとにあります。その山は4000メートル級の山で一度登ったことがあります。登山は私の趣味の一つです。また、オーストリアはチョコレートを多く生産していますので、オーストリア人はチョコレート好きということ以外、あまり特徴的なことは思い浮かびませんが、「REDBULL」という栄養ドリンクが、実はオーストリア製ということはあまり知られていないかもしれませんが、自慢にしていることの一つです。

今日は、美味しい食事といろんな人たちとの会話を楽しんでいます。ありがとうございました。

(特別) 桑折広幸 <ダンボールアートミニギャラリー……作品展示>

段(暖)ボールアーティストのヒロ・桑折と申します。今日は英語で作品の説明などをしようと思っていたのですが、出がけに妻が「世界から若い人たちが集まるのだから、あなたのきれいな日本語で話すほうが、その人たちにとっては良いのではないですか」と言われましたので、「きれいな日本語」で自己紹介をさせていただきます。(笑)

今回、北大構内に初めて入りました。北海道出身ですが、ずっとご縁がなかった場所ということもあり、これを機に、これから一生懸命勉強しようと思います。(笑)

窓側に並べてあります「段ボールアート」は、私が始めた、日本で初めての試みである作品です。いずれ世界の子供たちに、その国の段ボールを使って子供たちが作品を作成出来るようになる日が来れば、と願っております。実は、パキスタンの子供たちに段ボールアートを教えてほしいという依頼も来ています。もし皆さんの国でそのような機会がありましたら、ぜひお知らせいただきたいと思っています。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。今日はこのような機会を得てとてもうれしく思っています。

7 メラニー・ヤマザキ (ニュージーランド国籍・女性・千歳市在住)

こんにちは。山崎メラニーです。こちらが息子の渚音(ショーン)で、向こうで通訳しているのが夫の秀樹です。どうぞよろしくお願いいたします。

私はニュージーランド出身です。南島にあるモトゥエカという小さな町出身です。モトゥエカには3つの国立公園があり、Tramping(トレッキング)という山歩きを楽しむことができます。同北の清里町にずっと住んでいましたが、今年の4月に千歳に引っ越しをしました。もしこの周辺にの登れるような山があれば、ぜひ教えてください。

7月から始まるHOMAS主催の「英語で札幌をガイドしよう実践講座」の講師を担当しますので、生徒の皆さんに教えるのを楽しみにしています。どうぞよろしくお願いいたします。

8 バラン・ダリア (ロシア・女性)

ロシア出身のダリアと申します。現在小樽商科大学の留学生として小樽市に住んでいます。とても自然豊かできれいな街で気に入っています。

現在交換留学生として学んでいますが、交換留学の良いところの一つは、世界各国から来た学生と交流ができることです。小樽商科大学は小さいながらも 15 カ国以上の国々からの留学生がおり、オーストリアやロシアやアメリカなどの留学生もいます。国際交流のおもしろいところは、自分の国のことを伝えることです。たとえば、「ロシアンランチ」と称して、ロシア出身の私と友人が昼食会を開いたりして、自分の国の伝統や習慣、食文化を体験することがとても楽しいのです。

留学生として学んでいると、自分が自分の国とその文化について知るようになるということに気がきますし、ほかの国の人々が、私の国に「ステレオタイプ (先入観)」を持っていることにも気がきます。この 9 カ月で、ロシアに対する「先入観や偏見」にも気がきました。たとえば「ロシア人は毎日ウォッカを飲む」とか「1 日 5 回飲む」とか言われたりしますが、全くそんなことはなく、むしろ日本人の方がお酒を飲む量は多いような気がします。また、「ロシアはとても寒くてみんな毛皮の帽子をかぶっている」というのがあります。しかし、私の町は北海道と似た気候ですが、ソチのようなとても暖かい町もあれば、北のとても寒い町もあるのです。食文化では「ロシアではボルシチやピロシキを毎日食べている」と言われますが、毎日食べることはありません。

もし質問などあれば気軽に話しかけてください。いろいろ話すことで、お互いの理解が深まると思っています。今日はお招きいただきどうもありがとうございました。

<ダリアさんも 2 回目の参加です>



マサチューセッツで水車と水力利用の歴史を探る

—北海道開拓記念館北方文化共同研究事業 2011 年度マサチューセッツ州調査報告—

北海道開拓記念館学芸第二課学芸員 山際秀紀、会田理人

■「札幌器械場」開設と創成川の利用

札幌市の中心部を流れる創成川。1869(明治 2)年開拓使の設置後、この創成川の水流を利用して動力機械を動かし、さまざまな製品を製造するために、創成川の東側に「札幌器械場」が開設されました。1872(明治 5)年 5 月のことです。

「器械場」開設に先がけて、開拓使は前年にアメリカより蒸汽機関と水車を購入していました。1872 年 7 月には早くも「蒸汽木挽機械所」が完成。引き続き、水積 1,944 立方尺の水槽を建造して、大きさ 48 インチの水車を装備した「水車機械所」の建築に着手します。こちらは 1875(明治 8)年 3 月に完成。「水ハ創成川ヨリ木囲掘ヲ通シテ之ヲ引用ス」(『開拓使事業報告』第参編)と報告されるように、水車を動かす動力源として創成川の水流を利用するものでした。

「丸鋸」「堅鋸」「鉋」などが連結された水車は、「札幌器械場」の縁の下の力持ちとして、大きな役割を果たしていきます。

ところが、寒い札幌ですから、一年を通して川の水が流れるわけではありません。冬の間は川が凍ってしまい、思うように水車が稼働しなかったことも報告されています。1878(明治 11)年 12 月の報告には、「創成川凍合シ水車運転セス此ノ如キコト毎年約三ヶ月間市街井水モ皆該川水脈ナレハ自然減水シ火災等ノ時困難少カラズ適黒田長官札幌ニ在現状ヲ観人夫若干ヲ使役シ厚氷ヲ伐口流セシニ流水常ノ如ク水車運転ヲ得後以テ例トス」とあります。ここから、厳しい冬の寒さと、新しい水車、それを何とか稼働させようと努める人びとの動向を読み取ることができます。毎日が試行錯誤の繰り返しだったに違いありません。

■明治初期の動力機械のナゾ

明治～大正期に、欧米から北海道に数多くの動力機械が輸入され稼働していたことは、『開拓使事業報告』や『殖民公報』などの資料からわかっています。もちろん、これら新しい機械の導入を受けて、例えば開拓使は、「職夫」「工作修業者」などに機械の操縦技術を習得させています。

では、彼らが習得した知識や技術はどのようなものだったのでしょうか？彼らを指導した技師・技術者＝「お雇い外国人」たちが母国で習得し、北海道に伝えた知識や技術、もっと背景にある文化や伝統はどんなものだったのでしょうか？不思議なことに、開拓使や民間会社が海外から導入した動力機械の仕組みやその後の変遷などについては、不明な点が多数残されています。

これら動力機械の「ふるさと」はアメリカ(より正確には、ヨーロッパと言うべきでしょう)。動力機械、特に水車利用の歴史を探るために、2010(平成 22)年 11 月、アメリカ・マサチューセッツ州調査の機会を得ることができました。

■北海道開拓記念館の北方文化共同研究事業

私たちが勤務する「北海道開拓記念館」は札幌市厚別区にある道立の総合歴史博物館です。

1990 年以来、5 ヶ年を一つの単位として姉妹州関係にある地域の博物館などと共同研究事業を進めています。2010 年度からは「北方地域の人と環境の関係史についての研究」をテーマに新たな共同研究を立ち上げました。この研究事業の中で、私たちが設定した課題の一つが「動力機械の変遷に関する基礎調査」。水車利用の実地調査はこの一環として実施したもので、ここで、調査概要をご紹介します。

■アメリカ開拓期の生活文化と技術を伝える“オールド・スターブリッジ・ビレッジ”

本調査で大きな刺激を得たのが、オールド・スターブリッジ・ビレッジ(Old Sturbridge Village)です。ここでは18 世紀末～19 世紀前半におけるニューイングランド地方の生活文化、生業用具、建造物などの調査を実施しました。

施設全体が、勤務するスタッフも含めて、当時の生活スタイルを再現しており、特に、私たちにとって有意義だったのが、巨大な動力機械がほぼすべて動態展示＝稼働可能であった点です。「製粉所(Gristmill)」「木挽所(Sawmill)」「カーディング工場(Carding Mill)」は、地下に水路が走っていて、縦回転・横回転の水車が設置されていました。水を受けて回転した水車の力を、連結された歯車やクランク、ベルトを使って利用する仕組みです。

水車の構造は単純で、水の流れを受ける部分と回転する部分とで構成されます。「製粉所」と「カーディング工場」では、水車の回転で得られた力を、大小の歯車と長短の軸、ベルトを組み合わせることにより、離れた場所に連結された製粉用の巨大石臼やカーディング・マシン(梳綿機)に伝達・回転させるのです(写真)。「木挽所」では別の仕組みが施されていました。クランクを利用して、水車の回転運動を往復直線運動に変える仕組みです。これにより、水車が縦方向に回転することで、クランクに連結された連接棒とノコギリが上下に動くわけです。



■初期アメリカの工業化を象徴する都市“ローエル”

水力・水車の利用を大規模に展開させたのが、マサチューセッツ州北東部の都市ローエル(Lowell)。アメリカ最初期の産業革命を支えた工業都市です。街の中心部を流れるメリマック川とその運河を利用して、19 世紀の中頃、繊維産業・綿織物産業が發展しました。

ブート・コットン・ミルズ博物館(Boott Cotton Mills Museum)では、水車で得られた力を木綿工場全体に伝えるシステムや、その工場で稼働していた綿織物機械の調査を実施しました。ローエル型工場の特徴は、一つの工場内に動力機械と紡績機・織機をともに装備して、カーデ

イング、紡績、織布、仕上げまでの全行程を一貫作業で行った点にあります。

上記のオールド・スターブリッジ・ビレッジと比べて、ローエルの木綿工場の規模は格段に大きくなりますが、水車の回転を連結する各種の機械に伝達し稼働させる仕組みは、基本的には同じものです。

■おわりに

「北海道開拓と欧米技術の導入」といえば、北海道史研究の定番中の定番と言えるでしょう。だからこそ、本研究プロジェクトの中で、これまでの課題と新たな疑問点を、深く追求していきたいと考えています。

最後になりましたが、本調査では、北海道・マサチューセッツ協会中垣正史事務局長及び協会の皆様より多大なご協力をいただきました。また、現地通訳をお引き受けいただいたジュンコ・カーグラ氏には、マサチューセッツ州滞在中に公私にわたりお世話をいただきました。ここに特記して、厚く感謝申し上げます。（文責：会田理人）

ご 挨拶 在ボストン日本国総領事館 総領事 引原 毅

北海道・マサチューセッツ協会の皆様、今年の1月末に、在ボストン総領事として着任した引原毅（ひきはら たけし）です。北海道とマサチューセッツ州を含む日本とニューイングランド地域との関係を一層発展させていくために努力していきたいと思います。よろしくお願い申し上げます。

北海道とマサチューセッツ州の関係については、マサチューセッツ農科大学のクラーク博士が有名ですが、昨年は、北海道とマサチューセッツ州が姉妹都市として提携して20周年で、高井副知事も来訪されて盛大な記念行事が開催されたと伺いました。また、滝川市とスプリングフィールド市とロングメドウ町及び七飯町とコンコード町などの北海道とマサチューセッツ州の自治体が活発な交流を行っているのを目の当たりにし、明治以来の友好関係が今でも受け継がれていることに大変心強い思いがいたしました。今年の5月には、当地のマサチューセッツ・北海道協会の年次総会を総領事公邸で開催し、草の根レベルでの活発な交流活動の報告をお伺いすることができました。

北海道とマサチューセッツ州の交流の始まりは、開拓のための明治政府の要請による専門家の来日が始まりだと聞いています。専門家の長であったケブロン開拓顧問は、米国の政府高官でした。初めは中央政府主導の関係であったかも知れません。しかし、130年を経て、今や北海道とマサチューセッツ州の交流の中心となっているのは、双方の協会の方々、滝川市や七飯町の各自治体で活動されている方々などです。正に単なる国と国との関係を越えた幅広い国際化の時代の流れに沿うものであり、草の根レベルでの活発な交流こそ、日米両国の真の相互理解・友好関係強化に繋がるものだと思います。当総領事館は、そうした交流に少しでもお役に立つことができるよう、可能な限りの協力をさせていただきたいと思っています。



北海道を知る歴史発見の旅シリーズ 歴史探訪ツアー 実施報告

平成23年度 第1回 函館・七飯の歴史探訪コース (1泊2日)

実施日 平成23年 6月 4日(土)～5日(日)

七飯～箱館の歴史探訪コースの概要

[箱館・七重は、北海道近代化の歴史の原点] 江戸幕府は、ロシアの南下に備えて1799年(寛政11)、蝦夷地を幕府直轄とし、1822年(文政5)再び松前藩の領地とします。1853年(嘉永6年)ペリー来航、翌年(安政元年)日米和親条約による箱館・下田の二港開港、続く「箱館奉行所」開設というあわただしい状況で、蝦夷地は、再び幕府直轄となります。大友亀太郎が木古内・大野村に次いで、七重に「御手作場(開拓農場)」を開墾し、道南地区の農業は安定した状態になります。しかし1868年(慶応4年)7月～1870年(明治3年)12月のガルトネル七重村開墾農場事件などがあります。1868年(慶応4)5月、明治新政府は箱館裁判所(総督清水谷公考)を開設。戊辰戦争では、同年10月20日、榎本武揚の幕府軍が鷲の木村(現森町)に上陸～翌年5月18日、五稜郭で降伏するまでの「箱館戦争」では、道南地区全体が戦場となりました。北海道の近代化は、明治2年(1869)開拓使設置・「七重官園」設置など、道南地区から始まります。

[歴史探訪コースの概要] (1日目)札幌→旧簾舞通行屋→定山溪経由→中山峠(本願寺道路・現如上人記念碑)→鷲の木(森町)→七飯町昼食会→役場・歴史館見学(ニュートンのリンゴの木・ブナ林)→赤松街道→函館歴史探訪(五稜郭タワー・箱館奉行所、大森浜啄木小公園、石川啄木一族の墓、立待岬、高田屋嘉兵衛銅像)→ホテル「ルートイン」→夕食会「海光房」

(2日目) 箱館歴史探訪(ペリー提督来航記念碑、新島襄海外渡航の地碑、旧函館区公会堂・旧英国領事館・北方民族資料館)、ハリストス正教会、高田屋嘉兵衛資料館)→昼食ラーメン「函館麺厨房あじさい紅店」→金森洋物館(自由行動)→明治館前出発→七飯町「昆布館」→(高速道路)→札幌



七飯町歴史館展示室内にて



新島襄海外渡航の地碑前にて

(碑文)

男児決志馳千里 自嘗辛苦豈思家 却笑春風吹雨夜 枕頭尚夢故園花 明治十六年一月一日録旧作 新襄

IN MEMORY OF JOSEPH HARDY NEESIMA 1843-1890 FOUNDED OF DOSHISHA UNIVERSITY

元治元年 1864AD 七月十七日旧暦六月十四日夜半新島襄海外渡航乗船之處

昭和廿七年七月二日建之 函館市 1952 AD 同志社

[新島襄海外渡航の地碑 説明文]

新島襄は、新知識を海外に求め、吉田松陰の海外渡航の失敗を考慮し、渡航地を箱館に選びました。元治元年(1864年)江戸からきて、ニコライ主教(ハリストス正教会2代主教)に、日本語を教えたりなどして脱出の機会を待っていましたが、同年6月14日(新暦7月17日)深夜、福士成豊(日本最初の函館測候所開設者)の助力により、この地から国禁を犯して海外渡航に成功しました。上海経由で渡米した新島襄は、修学10年の後、明治7年(1874年)帰国し、翌8年京都において同志社大学の前身である同志社英学校を創立しました。

この碑にある「男児志を決して千里を馳す 自ら辛苦をなめてあに家を思わんや 却って笑う春風雨を吹くの夜枕頭なお夢む故園の花」の漢詩は、新島襄の自作自筆によるもので、元治2年(1865年)香港での作です。渡航前の名前は七五三(しめ)太でしたが、航海中に船長から「ジョセフ」の名をもらい、略して「襄」の字をあてました。明治23年(1890年)48歳で没。 函館市

□ニュートンのリンゴの木について□

英国の物理学者アイザック・ニュートン(1643-1727)は、1665年ケンブリッジ大学卒業、その年ペストの大流行があり、リンカン州ウルスソープの郷里に戻り、大学再開までの一年半を研究と思索に費やしたといわれます。この間、庭のリンゴの実が落ちるのを見て、「万有引力の法則」を発見するきっかけを得たといわれます。このリンゴの品種(Flower of Kent)は実が熟するとポタポタと沢山落ちる種類ようです。別名「ニュートンの林檎」は、接ぎ木で殖やした子孫が、英国の国立物理学研究所をはじめ、世界各地に贈られて、記念樹として植えられています。

日本では、1964年(昭和39年)に、英国の国立物理学研究所サザランド博士から日本学士院長柴田雄次博士に送られたのが最初で、東京の小石川植物園で接ぎ木されたものが、全国各地に分けられました。北海道では、リンゴ発祥の地七飯町と蕎麦やリンゴ栽培の歴史の古い深川市にあります。＜河野順吉前深川市長から、深川市の木の由来について詳細な原稿をいただきましたが、紙面の都合で掲載できません。深謝いたします。＞

+ + + + + 事務局短 信 + + + + +

平成 23 年度 理事会・総会 及び ミニコンサート・ミニギャラリー 実施

平成 23 年 4 月 27 日(水)午後、KKRホテル札幌 3 階会議室「エルム」で、今年度理事会・総会を開催しました。森本会長の開会挨拶、続いて、荒川裕生北海道知事室長およびトーマス・ライオンズ在札幌米国総領事館領事の祝辞をいただきました。これまでの交流の実績を振り返り、今後の国際交流への期待をこめたお話をいただきました。理事会・総会は、平成 22 年度事業報告・一般会計決算報告、平成 23 年度事業計画・一般会計予算書が承認されました。予算がきわめてきびしい状況にあり、一層の経費節減と事業縮小を強いられています。今回は、チェンバロ奏者明楽(あけら)みゆきさんのミニコンサート、ダンポールアーティスト桑折広幸さんのミニギャラリーを開催して、大変好評でした。また、今年度は、役員改選の年ではありませんので、各団体の役員交代等による当協会の役員名簿が確定次第、ホームページで公表いたします。

マサチューセッツ州からの東日本大震災へのお見舞いメール

3 月 11 日の東日本大震災・大津波の惨状は、全世界に衝撃を与えました。さらに先の見えない福島原発問題まで加わりました。これに対して、3 月末～4 月始めにマサチューセッツ州からたくさんのお見舞いメッセージを受信しました。スールト会長からの発信で、Japan Society of Boston 主催の大震災追悼集会、コンコードカーライル高校チャリティーコンサート(約 13,000 ドル日本救済基金)やお見舞い文「親愛なる札幌市民の皆様へ」、スプリングフィールド美術館の募金活動、ロングメドー高校の祈りを込めた千羽鶴などなどです。早速、新聞社、関係機関やホストファミリーなどにお送りしましたので、ここに、広く会員の皆様にご紹介しておきます。

新入会員紹介 (2011 年 3 月 15 日以降)：敬称略

<個人会員> 宮本 融 佐藤 ハル子

平成 23 年度 北海道・マサチューセッツ協会 事業計画一覧

□ 会 議

4 月 27 日(水) 平成 23 年度 理事会(14:00)・総会(15:10)

* ミニコンサート&ミニギャラリー (会場：KKRホテル 会議室)

□ 国際交流セミナー

① 6 月 25 日(土) 第 1 回 HOMAS 国際交流ランチセミナー「異文化理解のふれあい」

<会場：北大構内 レストラン「エルム」>

② 10 月 29 日(土) 第 2 回 HOMAS 国際交流ランチセミナー「ハロウィーンパーティー」

<会場：すみれホテルレストラン「ルピナス」>

③ 2 月 11 日(土) 第 3 回 HOMAS 国際交流ランチセミナー「バレンタインパーティー」

<会場：KKRホテル レストラン「マイヨール」>

□ 北海道を知る歴史発見の旅シリーズ 道内小旅行(新企画)

① 6 月 4 日(土)～5 日(日) 第 1 回 函館・七飯歴史探訪バスツアー(1 泊 2 日コース)

② 9 月 4 日(日) 第 2 回 小樽地区 歴史探訪バスツアー (日帰りコース)

□ 姉妹提携 20 周年記念の継続事業

① 2011 「英語でガイドしよう実践講座」 <7 月～11 月> (5 回コース)

② 高等学校 Eメール国際交流プログラムの推進

□ 2011 年 国際交流事業(受け入れ) <今年度は、東日本大震災の影響で来訪予定なし>